

＜夏季研修の開催状況＞

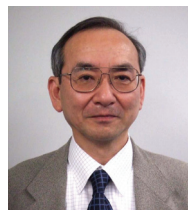
開催時期	開催地	参加国数	参加者数
第1回	2005年夏	アメリカ アイダホフォールズ	33か国 77人
第2回	2006年夏	スウェーデン ストックホルム	34か国 89人
第3回	2007年夏	韓国 テジョン	35か国 102人
第1～3回 累計		50か国	268人
第4回	2008年夏(予定)	カナダ ハミルトン	

35か国から102名の研修生

世界原子力大学の夏季研修に参加して

今年の夏、韓国・テジョン(ソウルから南に約五百km)で世界原子力大学(WNU)の夏季研修が開催された。各国の次代を担う若手リーダーが七月十五日から八月二十四日までの六週間の集合研修に取組んだ。講師として一日間だけはあるが参加し研修を体験できたので、その内容を紹介する。

(日本原子力発電理事 佐藤忠道)



小グループでのテーマ討議重視

日本原子力産業協会の方から「デモシジョン(廃止措置)の講師に勧められた。お隣の国だし、講義資料も今までに国際会議で使っている説明資料からピックアップすればいい」と思い、軽い気持ちで引き受けた。早速WNU事務局から講師用のインストラクションが送られてきた。読んでいくうちに、「しまった」と思った。とても出来合いの資料では通用しそうな感じがしなかった。

インストラクションの要点は、「一般的な情報は一切不要、「個別の国やプロジェクトに特化しないでグローバルな視点で」、「内容説明ではなく講義の後に行われる小グループでのディスカッションのためのテーマ提供型の講義とする」ということ。要するに前段の講義はあくまでも、その後のグループ討議のための材料提供である。研修成果の歩留まりは後者の出来によるのが大きいことを徹底させている。

午前八時から午前中が講義、午後は小グループ



午前中は全員で講義を聴き(=上)、午後は小グループに分かれての討議が熱っぽく行われる。

に分かれて別々の部屋でやる気にあふれており、質疑も要点を突いたものが多く。長期間を要するが技術伝承は大丈夫か?、「デモシジョンに携わる人間の士気はどうか?」、「長期にわたる費用はどのように確保されるのか?」、「デモシジョン費用は発電所のどのくらいの割合か?」等々。デモシジョンの講義から討論テーマが

午前中に二つから三つの講義がある。一講義一時間のプレゼンテーションと二十分間の質疑が一ユニットである。筆者のテーマは「デモシジョンラクションに就いて課題提示型に世界共通の課題とその背景を中心に進めたい」としての東海発電所廃止措置プロジェクトを織り交ぜながら、廃止措置シナリオ、コスト、規制に重点を置いた。研修生は非常に積極的

交流の素晴らしさ実感

講師陣も世界から参集

長期間で多くのコストを要すること、各国でシナリオが異なること、廃棄物処分場の確保が共通の課題であることを認識してもらえたと思う。

午後は小グループに分かれての討議である。九人ずつ十一グループがバ

同時進行でパソコンのキーがたたかれ、プロジェクトで映し出され、討議の要点が確認され、意見が集約されていることが特徴である。

講師は全部で三十二名、ヨーロッパ十四名、北米八名、アジア十名。今回は韓国開催でもあり、日本からは四名。筆者の他に日本原子力研究所の梅木博之氏と日野竜太郎氏、電力中央研究所の七原俊也氏が担当した。

期間中に、WNA事務局長のJ・リッチ氏、OECD/NEA事務局長のL・エチャバリ氏、元IAEA事務局長のH・プリックス氏、CAMERON社長のG・クラウン氏、CEA原子力局長のP・ラッセル氏など、原子力界の著名人十六名が特別講演者として参加した。そして研修生や講師をサポートした経験豊富なメンターは全部で十二名、カナダ九名、フランス七名、ドイツ六名、北米五名、アジア三名、中国五名、イギリス四名、ロシア四名、その他

用が健全な発展を目標にしている。原子力法と核不拡散問題に多くの時間が割られていて、これがレポートに反映される。この一連のプロセスが終了後の研修成果の歩留まりを大きく向上させているのは間違いない。

原子力の健全な発展を目指して

研修で受ける講義は五十五ユニット。原子力局の将来に向けての世界的な課題が中心である。世界

研修の主役である研修生は三十五か国から百二名、東京工業大学とGNFジャパンの方が参加された。

研修の募集要項では、原子力分野のリーダーを目指す者、大学院修士課程以上の原子力の知識と、国際交流を十分に図ることが出来る英語能力が要求される。年齢は三十五歳以下とされている。今回の参加者を見るに、現役の学生は七名、社会人が九十六名。男女別では、女性二十二名、男性八十名。技術系九十一名、事務系十一名で平均年齢は三十二歳であり、年齢制限はあまり厳格でないようだ。

【世界原子力大学の概要】

アイゼンハワー米大統領のAtoms for Peace宣言から五十周年を機に、IAEA、OECD/NEA、WANO、WNAの協力のもと、世界原子力大学(World Nuclear University, WNU)が二〇〇三年三月に国際機関として設立された。その役割は、原子力の平和利用と原子力技術の様々な応用を目的とした国際的ネットワークを構築することである。大学という形態をとっている理由は、若手を積極的に巻き込みながら原子力をとりまく様々な問題に学術的な姿勢と原子力専門家の倫理を兼ね備えた視点で取り組むことにより、原子力の持続的な発展を目指すためである。

大学と言っても校舎があるわけではなく、ロンドンにあるWNU調整センターが中心になってウェブ・サイトの運営、各種セミナー、ワークショップ、シンポジウム活動を行っている。調整センターの事務局は主要国から派遣される専門家によって構成され、運営経費は各国の原子力産業界が支援している。世界原子力大学夏季研修(WNU Summer Institute)は、WNUの主要な活動の一つであり、原子力分野において将来のリーダーとなる若手育成を目指し、二〇〇五年から毎年開催している国際的な教育プログラムである。



みんながお揃いのWNUのTシャツを着て記念写真

約一万ドルの参加費は研修生の所属元が負担するが、発展途上国に対してはIAEAの支援があり今回も二十二名が支援を受けて参加した。また韓国の産業界の支援でも九名が参加している。ある発展途上国から二名参加していたが、自国で百名を超える応募者から選ばれたという。確かに真剣さと意欲があふれていた。

六週間の間には、韓国の原子力関係施設の視察の他に、韓国の文化的スポットの見学もプログラムされている。また、研修の前半で、韓国の言語、文化、歴史が、ソウル大学などの教授による特別講演で紹介される。筆者が参加した日に運良く韓国の歴史の講演があった。古代から近世、現在に至る歴史をたづねると、韓流時代劇の人気のドラマの王朝時代や日本への文化の流れなど、興味深い内容であった。しかし日本による占領時代に韓国国民が強い苦痛を味わった時は、さすがに居づらい思いであった。

大学発展に日本の積極的参画を

夏季研修は今回が三回目。筆者は、その一端垣間見たにすぎないが、すばらしい内容であると思つた。良く練り上げられたカリキュラム、世界的な専門家を揃えた講師

陣、実務経験、教育経験の豊富なメンター、運営を取り仕切る世界原子力大学とホスト機関の事務局、そして主役である世界各国から集まった原子力界のリーダー候補生。

六週間の集合研修で学んで得た知識だけではなく、その後の国際ネットワークの維持、活用は参加者にとって貴重な財産となる。学生同士の交流はもちろん、講師やメンター陣の国際ネットワークも築かれていく。

参加費用一人一万ドルには、六週間のホテルの滞在費、食事代も含まれていることを考えれば決して高くはないが、個人で負担するのは難しい。各機関がその価値を認識するかどうかだ。日本から参加された二人の所属機関の先見性に敬意を表する。

原子力大学はWNA、NEA、IAEA、WANOの幹部の強いイニシアティブで運営されている。日本は「原子力立国」を標榜して、これから大きく国際展開を図ろうとしている。今後ますます世界の舞台で活躍する多くのリーダーが育っていく必要がある。国内で、さまざまな場所で原子力の人材育成が議論されている。「百聞は一見にしかず」、日本の関係機関から原子力大学へ積極的に入学(参加)してみたいかがだろうか。